〈編集後記〉

会誌編集あれこれ

山倉編集委員長の後を受けて，前迫編集幹事と二人三脚で26巻２号から編集に取り組んできましたが，早くもこの28巻１号で４回目の編集後記を書くことになりました。これまでに編集・発行した３回の会誌を見てみると，どれ一つとっても編集が完全になされたものはなく反省ばかりです。とは言え，前迫編集幹事をはじめ若い編集委員の努力によって新しい連載や企画の採用，また査読は編集委員を中心に依頼した専門分野の査読者がしっかりと行うなど，見えないところで少しずつではあるが改革がなされているのも事実であります。

先般，関西自然保護機構は，初めての試みとしてシンポジウムに代わって研究発表会を開催しました。研究発表会では，最近，研究助成を受けた会員の皆さんに発表をお願いしたところ，６題もの発表を申し込んでいただき，これまでのシンポジウムとは異なった雰囲気のなかで，活発な質疑応答や討論がなされました。参加者が少ないことを除けば，発表会の参加者からは異口同音充実した研究発表会であったと高い評価を受けました。この企画の狙いの一つには，日頃熱心に取り組んでいる会員の皆さんの研究成果を一人でも多くの会員に紹介してもらうと同時に，会誌に投稿してもらって会誌の内容を充実させていきたいということがありました。原著論文が少なくなっている会誌の現状において，研究発表会の立派な研究成果が原著論文として順次会誌に掲載され，いずれは会員の皆さんにも見ていただけるものと期待しております。

一方，掲載論文採用にあたっては，編集委員や依頼した専門分野の査読者に厳密な査読をお願いし，そうした各論文等の査読結果を踏まえたうえで，採用の可否や，修正指摘事項に基づく修正を行えば採用の可能性があるかなど，編集幹事と委員長によって総合的に判定を行っています。また，最終的な編集上の細かいところの修正や訂正等については，編集幹事と委員長の２人で行っていますが，前述のとおり単純な誤りや修正・訂正の見落とし等が多くて反省しています。したがって，単純な編集作業や全体の構成などについてはプロにお願いすることができるとよいのですが，とてもそうしたことは望めない状況にあります。関西自然保護機構の予算も，数年前までは数百万円近くあった収入が近年の社会情勢の変化によって３，４年前から激減して，今年度の収入は半分の250万円程度となってしまっています。しかし，こうした厳しい予算のなかで，これまでどおりの事業を実施し，さらに赤字運営であったものをわずかであるが黒字にするといったぎりぎりの運営を行っているため，査読者に対する謝礼もなく，また会誌編集・発行にかかわる者たちは編集費や印刷費，事務費などについても１円単位で節減に努力しています。

最後に，大変厳しい予算のなかで関西自然保護機構の運営と会誌の発行が行われていることをご理解いただき，一人でも多くの投稿をいただくなど会誌の一層の充実・発展に会員の皆さんのご協力とご支援をお願い申し上げます。

（小林圭介）

小川先生の視点

新シリーズ「世界の自然から日本の自然を考える」の連載を前号からご執筆いただき，今後の展開を楽しみにしていた矢先に，思いもかけず本会副会長小川房人先生の訃報に接することとなりました。本シリーズの出発にあたってはいろいろと構想を練っていただき，次号はカラー写真を掲載してみようと思う…と，楽しそうに語ってくださいました。

先生を知る誰もが受ける印象だと思いますが，先生は誠に快活・明朗・寛容で，偉大なフィールド研究者でした。世界を歩き，フィールドワークを通して得られた先生の自然考をシリーズで掲載できなかったことは誠に残念です。「二年は書くよ」と快く言っていただいたことを思い返し，次作をいただいていなかったことが悔やまれます。先生が世界の自然から日本の自然を考えられたように，本誌もときにグローバルに，また，ときにローカルに「自然を考える」ジャーナルでありたいと思います。先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

さて，今号は原著および報告などの労作に加え，2005年12月に奈良女子大学で開催された紀伊半島研究会主催のシンポジウム（関西自然保護機構協賛）「生物多様性と外来種」の特集を掲載しています。ＫＯＮＣ編集者の原稿依頼にたいして快くご執筆いただいた演者のみなさま，そして同シンポジウム内容の本誌掲載に理解を示された紀伊半島研究会（会長　奈良女子大学古川昭雄先生）に感謝いたします。表紙のイラストは外来種研究の第一人者でもある国立環境研究所の五箇氏に提供いただきました。オウゴンクワガタの迫力はすばらしく，研究者にしておくのはもったいない？ほどの腕前です。

次号は６月に実施したシンポジウム「関西の自然を考える」や今年度開催予定のシンポジウム「中池見湿地」を特集予定です。フィールドワーカーにとってはとくに暑い夏の到来ですが，フィールドで得られた成果はぜひ本誌にご投稿ください。お待ちしています。

（前迫ゆり）